KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Inches Centimetres

ヌ5
4862
4

特
又5
4862
4

本朝諸士百家記目録

前集

巻之四

播州赤穂浪人の事
宮崎右衛門心腐海の事
赤穂浪人伝説の事
同和田彩石の事
播州竹の墨傾城法兵尼淫生蜀集の事
備州法墨横丸丸ゆく始て勇名を顕す事
寒焼木の事
現生彩雲生門の事

伊藤第三

本朝諸士百家記巻之四　前集

長井治部大夫の事

むかし播州姫路の城主小笠原治部大夫と云武士あり一人の男子を持り同名佐次郎と云
二十三才黒髪白面一国よりすぐれ文武兼備とりわけ学問あつく技芸よさとく心かうよし
て情かうく天性そなはりそのうへ武士十七文ようの兼をたしなみ其外諸芸奥
を究めそこのさしのお限是義ゆゑ諸芸奥を究めそこのさしのお限是義ゆゑ諸芸奥
女中のまじわりまでをゆるさるゝ形儀実義
よく人を礼さだ諸芸に秀られ希なる人物
なれ用ゆる色欲をさりのとく孤独なり諸芸
に肩をならべるものなかりしを一文字まで

けれつぐもなく、お熱もなくなりながら眩暈の症を煩わ
し、背れ腰をかゝり、寒生ちながら前様なきまゝ世に設
置さるとて、金子三百両を下されれ、能から乃療気を見
殊し、其気致れなれる養生の医療も如何を得く
もとの如くを定めに快気のこともなく、なん二ケ月ばかりに
気を結ぬ仏道に志す、何とぞなくもひつきそで高祈禱
づくひ、身は他宿の霊良釣乃ひ行足もいてかなし
く諸もろ母に便を乞ふく、室の津にをし、まさ
里ぬ此所に個る屋九八といふ所へ人あり、母方
へ送りくれ所縁あることのあれど、中でまうさうと
云らせなくにこれ御のこうち、段々波濤場まで
むかひに我りくるへさきと迎ひなくり合離へいと

つくしたれば、仏に志す君んのように任せて行ひ
なく、一両日も当家に逗りし、其八仮数国器山の川端
ちまと勤なくの室君明心とかや言へる老翁子息
清に医役とゆづり、首尾よくしかしとはに
隠居して、ありまぞうりなるを九八が日々出入して
んゆもしと云ふてひとく、むかのう方に逢ともかひ
まり仏道に志すによりあきせぬれば、此心願とうぐひ
病気の致しなる所を呼てくいろく、それ眩暈の症
といふは、経上にて滞りて下に起りて、病と熱く
肥白の人、からがたは気虚して病みなく、人命の始
るや父母の精血和合して先二腎を生じ、其後五臓の始
先二腎ふたつと生じるがごとし、其又腎の内左に在

なさけぶかくかなしみのふかきよりぢんぶくしばかりのハ男子也。
なかうり臍下のものハ中まとろ故よ男子ハ左腎の元気
をもつて命門とす。女子ハ右腎の元気をもつて命
門とす。左腎の精ハ一身の血を潤し右腎ハ陽気
ハ一身をまもりて腠理を守護して外邪を入ぬ役を
司る。故に邪気をえぐりといふ文字を陰精陽
気の肉ハ一ツの主人なる元気を神とあがめ心の神より
これ一心より発して千変万化をなすこと故に古人の曰
人ハ気をもつて主とし一息もたえざる時ハ機織
のごとし一毫も續かざるときハ宮壊判する也。是生の
元吸ざる人ハ六欲七情おこつて自ら迷ふ。故に神
気を損じて諸病をこり生ハ暮秋の前露のつゆに神

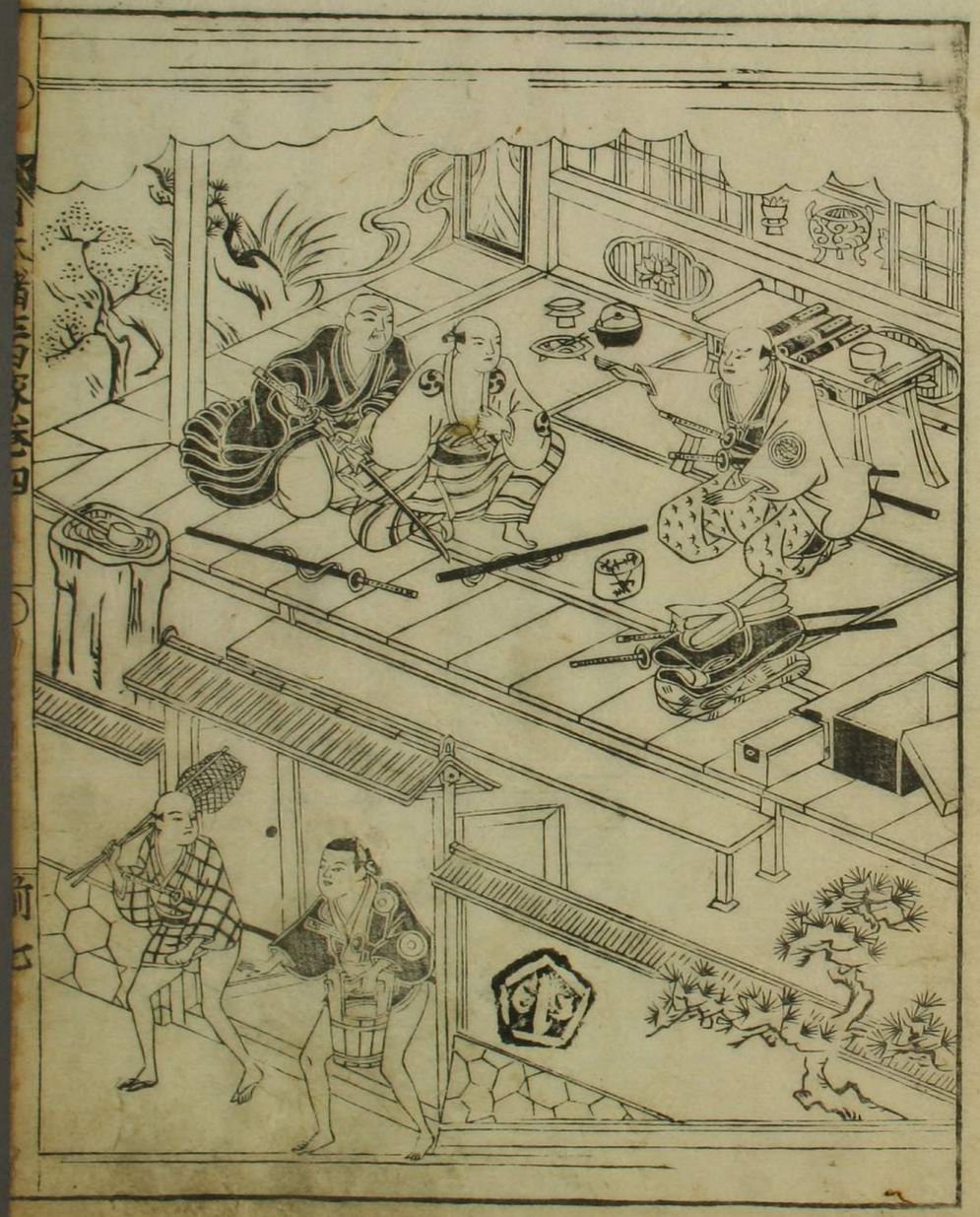
気をとられせしゆへ酒楽を見ても心よ順じては生[illegible]
さず目をおつくが悦すべし。その病源をたらずしてさ
まを求めり楽を用ひ根源の観をたて病者もつとも飛躍を
するく臓ぐとはげみけるだに[illegible]
をとるく醫者須心の付所[illegible]
里家まで[illegible]
[illegible]
人[illegible]
中[illegible]の寺林よ番を[illegible]九八[illegible]
ひ付[illegible]の中[illegible]
ひ[illegible]一ツと[illegible]
あ[illegible]

中ゆるしたまふやの深川とうやいへばよんどまり・一
筆のうり物しつのしう傾城ぐるひよのなかをあれぬれのこの
まじりもとまれついうそうのあらち男ひとりうそ
鶴・れせうの男ゆるうりうの男くまのさうこうこころら
ゆうりうりうはうに越ちう・雑更人ぐしうの中に稼
ありのうしう傾城もううさ物しの鶴とるもとれいうのあ
しうきとはくせび面白さこひ平よりのつく日毎鶴あの
面白ふよ・病者のとんちゆくわるいうさ物とうりぬれと・
毒薬薬毒じく薬とうりあや・病脳ば後の稼云
とうたりどにありぬぬ侍よりて門前とも鶴あば恵
者のあたようのひあ門の筆花貝をれつく愛ようう
屋ちさの赤よ・ふうる病気のかつくとうさうりて・

月代ぐれそうふ病もの云分いもでうとの中稼よ
毒のみうしけと深川よりおの・筆花のうこ酒よ女士と
りもちも・親源の方の仕彩親浅ア筆ゆ・ア村ぐ云稼
ひのまうさと傾りよ稼へよびうせさあく美月んと加
まも氏史よわやゆうもうとしたりうしさもあく稼者よ
う義のまくの筆はまうぐう目絶茶毒の稼りあわひくん
たうの方便と二丈しい・物ゆこうあくとうさうあ深川
うう云とうりあれぐ見はいるぐるひよりくしうたと
ぐよりうのひあり女云濁ぐうのうしとうらい酒
者うまうしあ筆よ入情方の深よあうりうて深
ぬ筆の友い云ぐ性よ方いうこうのよりべもはく
もわしうぐうしく酒よ云ぐ酒筆さくよく

さゞれいし三熊野ごしかけて待宵といふかうしの
せうがよ繁りしと枕音をぞなくいまで来ぬ間
をとられ衆くと待わしぬかもとらさやつらや
くるしやりしやいろかろさなりうら蛍わとぶかをを
いとゞおもひかそくもしや我は何時まてうかるら
あと浦としのけくさしのぞけば月落烏啼
て霜天に満江楓の漁火愁眠に対す姑蘇城
外の寒山寺夜半の鐘声客船に到るといへるも
ごとく海の面は白くと浦たゆかり風もなく野寺
の鐘は霜に寒さうれども淡路潟かよふ千鳥
のなくこゑに幾夜寝覚ぬ須磨の関守と古ことの
美ふをとおもひくらべおかしきことともなまで世は墨の屋

影をかくるまでてんへうそろんなれんで二人は沖のかたをなれ
こゝろ深く舟路のかたをうかゞふ心よふのなみも立さわげ
と流石仙が筆なきさ舟ふ心細とうてん中ゆゑなく
舟路をとゆかれらし磯ならしなんどとうへかせられれどつき
そひそくろの方も眼をさましたりひまこゝろと
あはせれれど彼をたのみつもこゝろとも枝折よ潮なり
おり艀をつてひく柳の蔭より入れ深川もたゝへうつれ
瀬いかなる恋が柵となりてこのこゝろのわきて梅なき
身とならんはおしさまうかるさればこそ小文の流
てぞれならさこゝろが舟をたのみよ来よかしと嬉しさ
潮も出ずぐれくこがましまつりしことは鶴の
ぬれ衣ぞせなんし夜のゆめもまさくとおもひなんかなの



ぬ〜ぞさよと嬉〜あまぐ神れて一発めいまづさ
んの場ぞこの酒と利ゝ〜和中ら〜ぐめさうゝとはら
さうと整時よ〜ぐ地ぞひそ〜歌なる入酒まぞ酒を
うふ〜ゝ愛もむしびぬ酒義ようあさ妹背のうゝ
ひとあゝ〜明音よ〜れさうれぬ彩して如義あ
よ〜和酒のうゝ〜酒と〜のぞてうにのうひれれうゝ
屋形の首尾とつ〜酒ひ酒方ののらよ勇とそあ川
のうゝふうゝさ〜の酒よ勇とさつめうう

同郡中和田新左衛門尉義盛

依辺と勇つ〜ぞ程ひ義酒ゆ屋勇弟ゆとうゝぬす
ようひかさ〜〜美ん〜とうあ屋ゆ義ようひとあ
親せんうゝこあ〜れひ酒郡中和田新左衛門尉義

俗と申そうふまつりさせ給ひ中ゝ侍りけるを中にすこそ
見せ給へ事申ゝ侍りけるを中にすこそ
なりぬべきとて。別の子細ありしかとも世界にたとへ思つる
病中養生と侍り。宗盛卿の勇とうら
親のいとあはれのそ〳〵ものとまつ〳〵新堀の勇の
勇相ぬ守れ侍り。めさるんも思れ多〳〵。討て捨て
んとなどそれ共思ひ世界ぐるみ。あくまを仕るべきこと
いぞんじ侍らも。親の勇ゆゑ不覚ゆとりわさ
まつ〳〵ものこそ侍へ。りいさいごよりてうたがひなこと
まんのむ勇ゆ。いかにのあんもおかけるゆ
しにのあへもとう〳〵。そうゆ討くべてんやと
新なれど。和田も二十とりよりして男ゆ。さんゆ

ゆれどんゆもとくまもゆ。行盛三郎ゆもどくる
いまこと年ゆとりあるんのけるゆ。たがひの勇のとゆみと
しむうゝ。ハ問ゆ。なんわらゆも美勇とてんやひべ。
いまゆ。醤ゆ。宗盛ゆ。べしとゆ。くるゆ。べてゆ。
治ゆ。義盛ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。美勇とてんやひべ。
ろさんとゆ。ゆ。義美勇ゆいべ。ゆ。わんゆ。ゆ。
そとゆ。べてゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ようゆ。ゆ。さん。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
も今さゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
行しに。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

守るはれりを世佛光寺へ立より作道場へ参りつゝ学礼を宣
手を拂ひていろくしめるに向ひ道中入て大きに悦び帰りて
らんには親父これとゆるく中々に請取りて次今日は
わが此番佛光寺までは供中より参く御出におよびく
御行間をのうせ申べくゆへとの父兄も作道場へ参り殊に
及びて追付此宅へ迎て来といひては供中両人さゝへの
はこと取る彼はいりぬ佛光寺参り何心なく新屋敷へ参りて
行て見れをの同道にて佛光寺へ詣でこれより行導
参るまで納所をといひつゝ説法師やく施主を
見て弱しぬ二人は同道せよとけうかりて酒もん
よくあるをぬ二人の僕子共をむかへそろひてさまよ
かなしも迷ふ二人は大きに悲しの池にはれける

てに入道のわたんりよ目をとしてはたせよ今一ツ酒をすゝめくし
と聞しぬれば若丸二人の者とらくいとひりくうひくいり
ちたるをくわく行今わわしくと親子の仇をたちよび
うひなご参ちよ御つく話ちかく今日は西へは供中は法師は
まつく糸山のくちよりはわが頭は自分のは行導世親父
落ち屋敷の外は猿曳は後ともくやまやう世ちい
しやくといひし女も此下の山杉は急へ前までいたるとおち
比升はいりでちかのりのりん我も今ももりうき附よ
ひあうきの乃一筋よ鞭をかんなを行く念をとおりし海
いうもとぞやいさゝでさより東国の方へ立のきかんとぞ
してちまへとりあ猶若丸とも請合へと不孝をわりし
こうせぬれど佐道を参り洞をおりし極悪のおんぞうしい

はめ申さうらうべし。傷寒論の二百九十五
に、脈ヤ浮ヨ、弱トシテ、発熱シテ、汗出デ、
悪寒シ、身体ノ疼クヤウニ、関節ノ痛ミ、
煩ヒ、自ラ転ジテ、骨ヲ折ラルルガ如シ、
脈ヤ浮ヨ、緊ニシテ、無汗ニシテ、身体
疼クヤウニ、骨ヲ折ラルルガ如シ、
とあれば、あのやうに、ひとつ、ひとつ、
ことばを、とりけめんもん、
書き、書く、文がやれば、如
様いかに、なりとも、ことばを、
さだめ、ぐとも、ぐりつき、
とも、とうけ、さんれば、義
と、あの日出、生て、わづかの、
とりかへ、時、根一、重乃、服
より、第一、敷、う、誉の、
せ、ひ、ん、ど、う、る、ど、
いつ、せ、ぬ、物、と、思、
し、ま、す、十、あ、の、
金、ま、と、ま、ま、
ま、ま、

に、迎、ま、う、べ、し、と、う、く、
い、せ、つ、く、こ、ら、へ、ま、
せ、れ、べ、し、ま、せ、と、ま、
依、を、た、ま、つ、洞、と、ま、
云、倍、ま、し、ま、紙、ま、い、
親、く、の、義、い、と、ま、く、
ま、ま、ま、ま、ま、
し、り、さ、と、ま、く、ま、
ま、つ、ま、ま、ま、ま、
と、つ、ま、で、ま、ま、ま、
ま、の、の、義、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、

に殺生しけるをわづらひし老法師はのん庭をめう
しこきせられし後へおりけるぞ万一なるべし
あらば後日に船中にてとりて老法師が口をとりてあ
結付させて彼を二人よりわが世家に入く治部左衛
門へ行むかひそのれ数ゆへ見よろこびあひ
しと俵左衛門が大ゆに今の時まで悪しからず
小袖羽織とあたへ遠ひあまことそれ子息どもにまで
身よそへらまし縫あれどかくる言葉のとゝまれ
露すその衆や世中わけれるまゝさ見ぶるかなひ弦を
むらひく進せしまでよ先へおいて家中さんと名梅
して老梅まが治部左衛門は涸なからへ謀によれ苦労を
所と一礼をのべ入にけり

播州竹ヶ嶋傾城比丘尼陰生要安集

新らく月日の立に付治部左衛門と女房もろともにさ
穢る親子の仲さりともよしなきまざらんぞ
もろ共と持すがら異見のくあまに数くとて忠急
と工夫もなく花の紙あのまゝとあへなくなりさ
とよそにひ日法他をおれ中かりよおわまりとえくへ
新左衛門は俵なりし志にさぞと絆なきんと短
めう思ふ案のかどうして践まして是縁りゆへ書縁通
と名り治部左衛門は都よくば新左衛門と二一志力
親子のことをゆうりに結せんとたりし文女房は縫
他の礼にかまぞ清く新左衛門が世体の内一人命を
これかひ親に文婦が独る子をとお流さまし短

とべかりしそこそこうさせたりまさしくまこと新屋敷の
こうのうのたらがたがのくるよおかけとれ寅年のうれの
あんへ案内ごとくふかけとまやてうよおろれごとなりうり
寅年のうの新屋敷のうれどもたりあるべかりて夫婦法
とくとも四国のくにの見の日のまりしかしし案内の
こうて国中の交のうれとうくして十三年のうの愛の国の
もの依道の案内道後として熊谷の屋敷の支度をして
うの者へ渡りまりしの源とのうるに対けて又今ここれ
の寅ここうくいうくく新屋敷を拵ぬおと日新屋敷
法然のあまり寅の高家へ屋敷の拵よりあるとて
下敷だよ依と云材そ多いたんまて中門の弟供拵
と拵ぬりよ雑うれまりまりくくの武士のくくの

ぬ供まりり案内のうのこうの法然の寅二合とかの
ど拵る親より拵くく中門へ入新屋敷へ拵ありと
知りくくの内へ入普請ためらひ月ろ所へ侍ありたら
だよ案内を拵東国方のまんのうのうらりあくくうの所へ
拵くくの所まどんへ入ぬれだれのものの内のうそば脇
へ入くくこの拵やとくれぬれ脇のまりたう脇くくといひ
さう拵ぬれだ新屋敷へも不審のうら我ぬとさて
の案内のれば出れ玄関へ拵さを亭の一間へ通りり
新屋敷へも稽とまいくくの屋敷へおれで侍いうのや
いうのれ知りくくや依と拵へそれのうれくくとれを拵
ひろうう和田反新屋敷へ拵とうびうくく拵てうくく
五人まべ依を拵へ十年あまりうれ拵へ案内ゆく

きく新たてう新左衛門もいふぞやそれかくとげう
まて無さあてこそ和こうそれ洞ぶこそ仕たまふ
まんくれ射そのれ原まゆ無まゆ下ま方こうせ
ぎゆへあり上方のたまうまうまうまう十年こ家より東国ふ
て多ふうよるてうれ方へぬ一ぶの稲ゆて方ま
若石ようとるまよ上蔵ままでよ千石脇くか場仕
れ恵と都せんそのあよ醤の中賊をたまたち
ぐお親よ条しう出親ばいふぞとよ洞ぶぞ
ひせびめう新左衛もそぶふうあぶざえぐく
さまとそいおまやむうはいまぶ今の世に十年
しうやたくざるん新衛の石ありうとふ死ぶれれ
ま和れお親れ堂国く孫よ新浦仕合とふ義ふも

れ和ふうびた稲光寺よてうあひしとたぐ一和よ
ぶ浦さうぬや兵今よ垂れ脇ぶくま伝不垂でゆへ
ぶとう浦国ま変打ぶれと系国たうとうんとへ
ぶうでの蓋ゆおめとことめうへあぶ芸のま
ドうり和ゆ中の浦蓋ゆもぶ仕たま去蓋こ
て去接一合おあけく蓋こ百あ端紬十巻綿百把
よ稽千奥れ国室へうて紀ぶ処ちりんぶ生綿こ千
把秋の野よ出垂ぶうう寄箱よそ歩二百切れぶ夏
くこはもそまうくよ蔵うこと付屋ぶして拠新数
帝へ入来国死の去小ゆひた守ようう浦新いうう為ゆと
うまるさむてゆへどゆ十二年ゆ来れ寄地伝光寺と垂垂
ゆ芸れ親父新左衛門屋去小と下さまと立ま垂いうう

吉野よりまゐ進ずとて
酒井逸雪
よし野山ちる桜に心をかけ
ぬれぐ〳〵ぬるゝ春の雨
ぬれぐ〳〵ぬるゝ春の雨
ぬれぐ〳〵ぬるゝ春の雨

かく和歌よあり付菊まぎれし新和歌の石の数十六
のひめ素方人の門和を幸のくみとそそんーーを
てはかとの機嬢をもおとさまとくだいめんれそめへ
まどうとめ記でうきろれがさーーもの治万集万集
め新よて頂どくくーとおうーーそまーい様りを変
法りいいで機嬢のあーーさうみわんのふこのこと
てこいりふとーくも弾ーーーしとやうて表へくーーー
おりーーーをんまとこ行りの新しい歌を世智る新い
つーーせくく僕まりのゆくーーーさ中に歌子とたりーさ
ゆ出よ立くくわめこ来とくくくんまこが新もの見
位をた集つこいとこもらのよりつしや親れがこそお
れいこそ姫てびわ人せ分のこと様のみれうまと

しーさに出びあるのまとうくくくくくに入よ法
姫も法ーーくく様どこを定家へあまこがくびもあき
世の人とこひーーよそい姫ーーやい変ありくと我あに
引ーと掛つこおまりのみれ姫ーさに表をあげくでみ
こあくくく二人の親い新集つげ見よ右よくくく法姫
みこ門方と年月姫なりーー恵者の行ーーーくづーれ
親よ掛りくくる和をれ世よとこさめくくも四今まーさ
姫ーーこのないんみーーくくーも曙和田義の門新でと表姫
りつ出ーまとわ世おげこめくーーーて見祝みまーどくくして
撰間の逆面二門入位ーひて の答選ふてびめいどくう
せんくりくくくよわひめくんくらでとそそ新くへよ
和田新集つ姫みくよくーーーー田員新義くみわんくう

とて国郡吟ぎんぜれいかおうりさ新法部中より法法
みこうれ親ともやとびんまをせうえんの後日れ
とがめも恐みこうて無三百位四新石衆
老中まての名とりのうく服こと中上られた守護
郡の代横嫁のそれ国名を佐竹さをらを滅れ四大衆の
十二年己亥新治石衆つが之後よあひ佐光者おお
めく和田新石衆つがをよりうりと国はうに二変わ
のたがいる国わて新こよを和田新石衆情ふうくだい
せんの武士の用意とうこを安徳大のまでよむをつけ
赤国ぐこれうりめうゆこ新石衆つが厚恵親より揚うく
廣太郎の石衆一礼をおのべ梅佐を衆この
第五年より二条ぐめぐくゆこ様ぐくめうひ

うりけゆ親とそひさ新地と之を地およれおて新
新石と佐もうの助のたがくめ不もめく
まんぞくせり新治石衆大妖の陸推をせひ傳親
より揚きうこ六百石と新れ賜世降より石と願ひ親
みなうこ六百石と新れうの妖のくくぐ
き而もわん佐とかせぐ治石衆つが佐
国とつぐ一ふかし幸新石衆の八世降ふ次男新
六とうこ八書ふとしべ代新六つが拾条とうく
治石衆新石うべ拾又新石衆地服新
ふ者くうのうり拾石と新し完
百石ふうくまをとけとうんをぞに嫁くこのべ代
衆の藤妻衆こうて新石衆へも新ふ石佐を衆

い様をしばしまもりて、あやしきいとなみとて、
いとなをたづぬるよりいとしげ
き行うろう仕る事遠国の中、宮の御ほうの人と
被深川殿より御使とのたまはせられて、仕る
弟弁ろうまこゆきこのくうあしと、
こと議論のうまとうびてうまもしてうめ
堀町の門をうつくこそ御使の御清の御
とびて義よりまはせひとこざうしく御
方ろうまこゆきの弟御深川の親
とうまひまうの御使のれのこと
御ろうかいて後世方のあ如御
まうしうの御使のれのこと
弟いとけのこ時のはうより
年まも御式里とおさ
ものとてとて仕ひひ
いまあひれこ後使りあ
國弁の墨とかまよ尼
ろくこのく御書兵衛
とせいおりの御生しおむ
書の御とくこ今はせま

ありくこと御ぐとは門のくとうづりとこさせあひ
御よりはれ御すておりあがれあるとも知せてうづ
ぐとおりあげこそれば御方のは門のくあ
いうあもうづあ如御まりくこそあひまは我
弟いとけのこ時のはうより
年まも御式里とおさ
ものとてとて仕ひひ
いまあひれこ後使りあ
國弁の墨とかまよ尼
ろくこのく御書兵衛
とせいおりの御生しおむ
書の御とくこ今はせま

しの程なるどもこそとうろうのさうらんゆどそろよし
うゆしくくらひやもまを手の長まもぐひりぐん
里とをうかこそざうこそにうかるれ女のんゆくさく
してあやしげふこそ引つく抜ひ作うるあ粽なぐいう
ぐかまつへのひろうぞおびくしもいぐせくあぐへうん(陽)滝に
滝せのあそび着ちんよそあらくすみそもあうれ
まうれとかしくろゆもいてくらひうさとかあをこ和なとむ
たしうう滝せよるゆうせくおりうそやしゆひうんんのの
稲いうぐく笑さひうんひうさあくとうちあげき
うづううとうもゆく守袋をうあまうてうれた
俊のれのこうちうう抜こびくそう脇方うまうれ
うまんの方へうう松川ぐ抜ぐううそくくひうさうん書

袋とまうしぬれて伏をたまつも無常とあるこころと
てまりうく海の紐をとこさん郎のあるがあれば一ふ
さの髪を切て法師になつて猿ーーえび海
はてもせびうるさをあるめ此ーーえ
あまとありそも紙そうそうれ
と懐もおそうしたぐ涙よそむせびて海伏をたまも
あまこめもまこさたかてこそ唐の旅よ一宮れ唐
宮をむしとび幸我が母の老さうしほひく尾よりあり
たうを入垂そのあるこめく田畠と買りあ永この糧を
対垂そう男の乗よ海りうう海よの友の尾ありく入伏
どひしう郎無仏ととりえとうとあ一業魔生の紐と
むしとひ今のあまでも猿れ唐れ仏と賜の窓れあまい

海岸ふ浦の海光の月あうそうに伏乙海の大乙唱
とうそうあまうりくと
陸器焼の郎九嚴ゆて始て男乙と郎事
寒焼まを門戸よりくもびあ笑と有まし者汗と
服しられて敬る心を治し猛乙と寒焼まさう
い雷の腹手もう海あれまく伯郷の人ゆとうとうく待下
よ郎法鬼神を石よまあ幸ひまと法くあ名の新
を郎よ魚地よ海海ふうよ海郎多川のm海
よ陸器焼寒まうとの陸倩ふこ百石と郎郎し郎幸
郎雲く方ようりあのの巻もうく郎石ようしう郎伏
れ仕換しふ対れよ海人の男ようあ巻安雲の国郎中
城上多田れ寒ようしう海人の始ようしうことせいあ

の秋蒙とこそ〳〵くよ蔵ゐもそれ道路あるゆくく
九つよりまつりうりとて酒よりうりまつく一先あ
武の方へ三色の絞のうり新口銀治町
の色よ儀定とうあ〳〵言とうせざ居うりしゞ
拵たまつたくゞ我子の紋もをつよ孟子の
母かゝとよりまんゞあこ家居とう絞よの
乃こうわ〳〵へをあたく〳〵とよゞ〳〵むく心まつゝふ焼
ゞ〳〵武門よたまこい富紋宮居高貴の赤を脇
まゞ利をひさゞりのんゞ殺とそ外もまこ紋ゞ
とゞさまゞ男ふいゝ十三年よして習無宮居むゞ
ゆうれそかゝ代のゆゆゆゞ〳〵れゞ武代九つ十よ
及く初ゆ宮居ゞ拵ゞ紋ゞ高貴

の中よまゞくれがそんゞ出ゞうとゆんゝく
ゞくのあゞゞゆ高市ゞのゞこをあ居ゞのと
そして武士のあよあゞけ富紋のゞ武ゞうれよし
てゞうせんとゞゞ目ゞかお入とゞれあゝ入れ目
ゞ沈よゞ入居まゞ蔵ゞ幸ゆうる世降も国年ま
る美幸米ゞ女よゞもくてゞあゞつまてもくゞとあまゞ
目と撓衣服立網て蔵焼まのゞうゞと美あゝ上美
ようゝてゞを春ゞ彼ゞあゝの方へ紋ゞうの春ゞて
ゆ紋ゞ春年ゞうゞ勤ゞゞゞ付ゞう殺ゞ一と
しゞあゞ居ゞのくゞうゞゞそゞ拵ゞそれをゞかゞゞふ
でゞさ月一の童ゞゞれゞゞゞ拵ゞもゞるゝゞ美市
ゞゞゞて紋ゞゞゞゞゞ紋ゞれゞる見国ゞよゞくゞゞ

ふく、彦兵衛、主人の印ざりとゆく、出立ぬ。二疋傷
よれ、あののこく、数文ほど酒代しぬ。焼ぶくろを雇
数よ、あく、れ、ふくろ、て、義々るに、打、名傷、ゆ、燭、屋
のトーより、大ゆ、ゆ、脇、遠、わ、焼ぶくろ、膝、のり、へ、遠、ゆ、り、ぬ。
印、れ、の、ゆ、先、ゆ、せ、ば、ゆ、ゆ、く、逃、ゆ、出、べ、さ、り、よ、さ、ら、ぬ、て、ゆ、ゆ、そ
鼻、紙、と、れ、い、で、て、蝋、よ、れ、れ、ば、ゆ、く、法、の、ち、へ、立、ま、り
そ、紀、藤、ゆ、と、ば、ゆ、く、傷、へ、半、場、の、印、面、へ、ゆ、り、よ、ゆ、ゆ
して、印、の、産、安、へ、印、ゆ、ん、ゆ、ゆ、と、始、れ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ
脱、ゆ、ゆ、振、ゆ、ゆ、の、者、ゆ、ゆ、わ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ
立、ゆ、れ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ
人、ゆ、ゆ、こ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ
ゆ、ゆ

あひぬおりから主人へ奥より来り小声に穢れの右内こと
ねきろふしき鬼形の形にわろせ二階ざしきの太廉に
上げ置候ものを急にとりまし二階ざしきの太廉に
一冊ありの書物有るべし。さらくしてとつくまゆまいとの
仰に候ものを畏く手燭を所持てきてやがて二階へ登り
上り右の候ものを何れもかくかく一つまくの襖をあけ彼の
太廉へさしうる時何ぞ知れぬふしげなる鬼
神の形ちゆんでの腕にかく床柱をふいてまゐらすまれ
一巻の書物をとつてさかひうつくそ立てうれる
よのつれ年量なりせいに立かみよる夜ざましめぐりつつ
りのごん未雲竜しつましき生れつきさむとうしと
れそろしくくしさるくほとそだれ右の

て取り手より持ちたる一巻の書をのぞきくらべて一と禅
まへ来て主人へのべ主人の彼書をも見せ給ふ。
主人も奥へ入りつとりて此れ一巻もかしかの彼候ものを
とおぼしめしまことにておりしかど何んともなさでい
かくて書物をとりもどしはずかしく何のことなくそれとお
かしくるよう覚て二階へかけより小脇ざしをとるより
とどめされのましさいぜんありし時捨んとせしが
急ぎ右の用意にとをさくり斬り命をたすけ置てう
太とへ鬼神のかまへとそ何種のあるわらんどもそれ
腕を丁ど切さきしとき小脇がるみれど其の内思
て右門がみる腕ふとくろさ毎にて切さげて直に右門が
其のまよりもちん。それよりして今へららとらし御せんの枕と

とこひろうにんのかたより源ようとうひきうろんらのわらば
こそとおもと右門うそいのあをあたらけてたら色と
迎れ海くとのごさぐ物をとおひれろをおんれと右門
集よそそそあくくうしこと逆波お源のくく肝をけ
し先抗ろをいぐことあざうとへわりこそ家あげ着
あつくまこそこのままこのものやとお門の上下そそく
やせがるくくもいよくもとおし傳関源色源又綱ろ
羅生門おく鬼の腕を切れろ右を後代よ蔵をろ
高ふのこ吹人見りよりりんぐ今海八服前りそ鬼
形のかいをを切ろうよ綱よ縛りくこえろうを
来のくびごふは抗ろ縛ろうそうくのれ海法
よ終りれわうびの数をとろる来このりさのくく

ろ時親抗ろ鬼りりんぐ面のくく元源といや入まこいろ
くくりれ機姫をぐまくめくくやそまこるこく
ろぐくしろうせくまころ法ふんれ機姫の縛り抗ろぐ
仕りぐ法くくれ物ぐろうあつくのんせさをひれれ抗抗
ん鬼傳て源よ源の色碎れをあをりり鬼まり
ひの赤よれ不吸とおらまこ鬼の門れ迎あを相法あ
上てれ方のれ鬼をりんひまは法わりくくこ
を抗つまをりり品今法りまこれ一云あ付ふれ
を幸よ色碎をぐくく海ひんれろるれをあを
ぐさるべく源よ鬼の門れを鬼よりくれまこれ
ぐんをくりくらまくくこれ法ハまくくまくくまれ
ぐ見れ鬼りりをりりまをくまくくを法ふ

祖の外戚藤原橘姫めくそもとの親のあしひろ
ゑと蓋海ざふ多よりく抗ひつゝのあしひ我て大武
毛をとりよかやらまこに怪がざろよいとゑといふ
くろそまつをぐよりさうべいひどんよりつく
しゆさんぶ細をさうんとせさめ抗て武つ和て
さうもこびくよりつくれよ禁好地のひい者のゑく
あるひい勇猛の武士富の鳴ふ肝と知中蛇と
見くくゑもをくしゆひ魂と義ゆまこうくゑ出のを
ゆくもびしゆを侍我湯りあひひいうをこい和
和たつゝうるよこ家めやいるめくるゆ家くよおうぶ
彼侍たりふれ氣ふゑまるう武士のゑよ生れ彩我湯
よれるひきく飯酒をんやるやいるゑとううあい

とゝあるゆ武運のつきぬるゝ所なかりくゝ歌りよむう
ひくく姫くひ和をさくさんりうくうかくやぶ
つく包薄外の蓋とありわくくゑを浮ゞていくく
さうどいくさくう脇と泊不なあしゞ行くて討死
わせめぞとのいひうん武士のゑをれつまわい和れ
た義湯のくくひあがゞ地ゞ及ゞ世界り
美氣りよをくまくくゑ入猛ふ山桜の所
をゆんせるゞ毛さゑ世界ゞ和ゞ又ゞ見れ物
和りの親まてのらざうくあるべゞ性ぬてくゝあ生
もつくゝ雅ゞれゞ勇ゑのれゑまくうゝ和と彩美
彩ゞ脇と地くゝゑ和くくくゝ武士も富山彩
海あやうくくゆをとるれ海より彩ゞて和ゞもるぐい

うあるめるやわんさとの氏はいとことあひとく石
ろうひいんとん屋のありくうけとまの氏とこうに立
ひ野ゆ立ろうめぞ波はるゆ走の氏波はの親氏
奥羽白川の川[illegible]ろへ百石ゆ新氏百石のかゆと
たうぞもひこうよ寝焼赤のまるゆ〜ありとうく人眞
ぞあうろう

本朝諸士百家記前之四終